

震災の夏は 夫の郷里、釜石のお寺で津波の犠牲になった方々の初盆の法要に参加した。

4月はじめ釜石線が漸く遠野まで復旧して駆けつけた時以来の釜石、瓦礫はかなり片付いていたが、その先の動きが感じられず、「直後の方がまだ身体を動かすことがあった。今は何もすることがない。仕事もない」ともらされた。過疎化の波は一層強まり、街はひっそりとしていた。

長年家族ぐるみのお付き合いだった夫の親友が亡くなりお焼香に伺ってもお互い言葉がなかったが、まだ遺体が見つからないご門徒さんがあり、遺体が見つかってお葬式もできた親友の方はまだ幸せな方だという。そんな慰めを受け入れるほかない現状だ。

「うちの豪邸にご案内します」と仮設住宅へ連れて行って下さる方があった。前年の夏 そのお宅に伺い、コーヒーを勧められたが、時間がなく玄関先で「次回に」と約束をした。その土台だけになった玄関を黙って踏みしめた。あたり一面土台だけの家々が続き、そのまま海まで建っているものは何もない。すべてを失ったが、夫婦そろって命が助かったことを喜んで周囲の人々のお世話をしておられた。釜石では一応、足りているから他を手伝ってということで、サーバスの大船渡のW.Tさんと気仙沼のT.Nさんのお手伝いに終始した。

15年あまり昔、当時のサーバス会長だったウェールズのSさん宅に女学生4人とホームステイした。その日はお昼にパーティがあるから参加するように言われて、街から戻った。チェルノブイリの事故いらい現地から毎年20名の子どもたちを呼んで、地域の家庭で2週間預かることを続けているという。ロシア語の子どもたちと英語のホストたちの慣れない生活のなか、1週間目の中日に全員が集まってパーティをすることになっていた。この取組みに賛否両論はあるけれど、Sさんは医師として何もせずにはいられない、汚染地域からたとえ2週間でも離れることで甲状腺ガンの発症をおさえることはできるという。流石にサーバス精神の権化のような人だと感銘を受けた。まさかやがて日本にこんな事態が起ころうとは夢にも思わず。福島原発事故以来そのことが思い出された。そして、この夏休みは福島から子どもさんたちを預かることを夫と決めた。

サーバスは創立50周年記念誌の出版と祝賀会の準備で役員さんたちは超多忙、続いてポーランドでの世界大会、とてもサーバスとしての取り組みを提案できる状況ではない。それで今年はとりあえず試しに個人的にやってみることにした。そこへ滋賀の真宗僧侶から自分たちにできることはないか相談の会を開くという連絡、その指定日は都合が悪く、こちらの計画を伝えた。するとそれを全面的に支持してくれることになった。

若い僧侶たちが募集のネットへの掲載から、子どもたちの交通費の支出、バーベキューパーティまで開いてくれた。被災地へ出かけて行ってビーズ細工のボランティアをしている湖北の若い僧侶が来て半日を楽しく過ごさせてくれた。また別のお寺からも招待されてプールで遊び、昼食、夕食をご馳走になった。結局、Wがしたことは孫を交えて海遊館に遊んだだけであった。

当初2週間を予定したが、当人たち(中学1年と小学4年の姉妹)は既に龍谷大学福島子ども会の「元気もりもり京都キャンプ」に参加して、その続きに我が家に来る。初めて親元を離れるので10日間が限度とのこと。我が家では1週間の滞在になった。年寄り夫婦の家に急に孫が2人増えたようににぎやかに楽しい日々だった。屈託のない子どもたちから事故の様子、福島の日々の生活を聞き、赤ちゃんを抱えた母親の気苦労を特に痛ましく感じた。

私の住む町では子どもたちが巣立って、空き部屋のある家が多い。子どもたちの世話のできそうな所帯は少なくない。まず我が家で試してみて、それが自然に広まることが望みだが、それはそう簡単ではない。サーバスは外国からの来客とホームシェアをすることに慣れている。色々問題はあられるかもしれないが、一歩被災地に身を置けば、安穩に暮らしていることに痛みを感じずにはいられない。

大きなことはできなくとも各家庭で小人数でも受け入れて被災地との交流が図れないものかときりに思うこの頃です。対象は幼児を抱えた母親、狭い仮設住宅で勉強しづらい受験生などにもひろげられると思います。